

オランダの年越しは大曲・土浦・長岡（「日本三大花火」だそうです！）に一気に行くようなものだと思います！
一般住民が自分の家の前で小一時間打ち上げ花火を上げまくります！1回で10万円分買う人もいるとか！
怪我やゴミなどの問題もあるようですが、私は大好きです。（川崎）



一般社団法人日本イエナプラン教育協会

オランダ支部 会報誌

vol.5 2019年2月号

オランダでの妊娠・出産レポート

(牧野 恵)

私ごとになりますが、2018年10月4日、オランダで我が娘が産まれました。そこで、今回はオランダでの妊娠・出産・育児について、私の体験から印象に残ったところをレポートしたいと思います。

妊娠・・・

まず、妊娠が分かると助産院に行きました。オランダでは妊娠・出産は自然なものという捉え方が主流とのことで、病院だけでなく自宅出産を選ぶ人も多いそうです。また、特に問題がなければ医師ではなく助産師のもとで出産を行うそうです。私がお世話になった助産院も助産師が何人か集まって開業しているところで、医師はいませんでした。毎回の診察はその時々勤務している助産師にお世話になり、出産の時も待機している人が担当するため、検診は出産までに全員と顔を合わせられるように検診の予約が組まれているようです。さすが、ワークシェアリングが浸透している国ですね。

私の妊娠経過が順調なこともあり、毎回の診察は血圧測定・胎児の心拍確認・問診、というとてもシンプルなものでした。エコーも4度のみ（そのうち1回は体が小さかったことから、追加の1回分でした）。体重も初回の問診と他に1、2度測られただけ。よく日本の検診では毎回の測定で体重増加を注意されたり、尿検査の値で食事制限をしたり、などと聞くものですが、拍子抜けするほどあっさりしたものでした。質問も特になければ毎回10分程度で終わってしまうので、検診前には夫と何を聞いたらいいか相談するほどでした。大らかとも言えますし、悪く言えばおおざっぱな検診ですが、ポジティブな私にはかえってそれが合っていたようで、毎回「気分はどう？」と尋ねられたり、心音を聞いたりお腹に触れて子宮の形や胎児の位置を確認する度に「パーフェクト！」「グッド！」と声を掛けられたりすることは、とても嬉しく、毎回の検診も特に苦になる事はありませんでした。助産師からは子どもが心地よいことも大事だけれど、お母さんが心地よくあることも大切だ、と言っていました。そのため、特別に体重や食事制限もなく自転車に乗るのもオッケー。町でもお腹の大きなお母さんが自転車を颯爽とこぐ姿を見たこともあります。（さすがに私も自転車は怖くて乗れませんでした。）もちろん無理は禁物ですが基本的には妊婦の体調次第・自己判断によるのだそうです。オランダ人女性はかなりパワフルなのです！そのため、私は検診で体重を測らない代わりに自分で体重をチェックしたりお腹の様子を気に掛けたりするなど、かえって自己管理の意識が強くなったように思います。

出産・・・

陣痛が始まると助産師に連絡をして、陣痛の感覚が3～4分間隔になると助産師が自宅に訪問し、子宮口の開き具合を確認します。開いていれば病院に行き、（病院の場合、出産のための部屋を助産師さんと共に間借りする感じ）自宅出産であれば自宅での出産準備が始まるそうです。私のお産では自宅出産に少し憧れはあったものの、異国の地での初めての出産という事もあり、病院出産を選びました。そして、結局予定日をまる二週間過ぎても生まれなかったため、促進剤を使用してお産となりました。さらに紆余曲折あり、当初予定していた病院ではなく隣の市の病院で出産することになってしまったのです。ただでさえ不安なお産のスタートでしたが、それらにかかる転

院先の病院や必要な検査に関して全て助産師さんが病院と連絡を取ってくれたため、私は直接指定された病院に行くだけ、というスムーズさでした。また、オランダではホームドクター（かかりつけ医）の登録制度のため、こちらの医師にも病院から情報をコンピューター上で共有していたようです。（病院の登録時に私のホームドクターに情報を共有してよいかどうか尋ねられました。）このような事から、オランダではかなり効率的な医療システムとなっているのではないか、ということが分かりました。

当の娘の出産では、産まれた時の呼吸が弱く、元気いっぱい！というわけにはいきませんでした。4日ほど入院し経過を観察し、容体が落ち着いた後、自宅に戻る事となりました。（基本は何も問題がなければ即日退院となります。ひえ～！）酸素チューブを付けて保育器に入った娘を見て号泣したのも、いい思い出と思えるくらい今はすくすくと日々成長しています。

写真はお世話になった病院。
ガラス張りの建物がとても開放的でした。



産後

産後では、クラームゾルフ (kraamzorg) という名称の、産後ケアのプロが自宅に毎日数時間、連続して一週間ほど訪問してくれるというユニークな制度があります。私も事前にクラームゾルフと契約をされていて、子どもが生まれてから連絡をとり、自宅に戻るタイミングで来てくれました。私は幸運にも日本人の方に依頼することができました。

新生児のお世話の方法を教わったり、私自身の産後のケアのアドバイスをしてもらったり。そして、それらの基本的なケアだけでなく、私のして欲しい事もお願いできました。（例えば簡単な食事の準備、掃除、睡眠がとれるように子どもを見てもらう、お子さんのいる人は学校の送迎など。）もちろん契約するクラームゾルフのスキルにもよるので、誰に来てもらうか、事前にどのような事をしてもらいたいかなどの打ち合わせが必要となりますが、一律のサービスだけでなく個々の必要に応じた、かゆいところに手が届く制度は画期的！と思いました。また、ケアが必要であれば助産師の承認のもとで時間数を増やしてもらう事ができ、私も母乳の指導を受けるため、少し時間を延ばしてもらうなど、ケアを受ける人に対して柔軟な制度だという事が分かりました。また、支払いには保険を使うことができるため、費用の面でも安心して依頼することができます。

この制度のお陰で、出産後即退院という一見大変そうな事も、私にとってはメリットが多いように思いました。慣れた自宅で早いうちにリラックスして過ごせること、夫と一緒にケアの方法を知ることができたこと、子どもの実際の生活環境を見てアドバイスしてもらえること（寝る場所やお世話の道具の置き場所など）など。日本の快適な産院生活も魅力的でしたが、自宅に戻った時の育児環境のギャップや夫の家事育児の協力について話題となる今、長い育児生活のスタートに、このように一人ひとりに合ったケアを提供できる制度を日本で必要としている人は多いのではないかと感じました。

オランダでの妊娠・出産・育児は不安な面もありましたが、オランダのゆったりとした雰囲気と制度のお陰で、今のところ(笑)安心して過ごすことができています。日本に戻ってもし出産する事があれば、色々な面で比べてみるのも面白いだろうな、と思います。ざっくりとしたレポートとなりましたが、私の体験記でした。

ところで…

〈会報誌 De kring タイトルの由来〉

De はオランダ語の冠詞、
kring は輪（サークル）の意味です。
イエナプランの大切にする活動の1つ、
‘サークル対話’に由来しています。



支部メンバーで新年会。2年目もよろしくお願いいたします！

忘れられないママの一言

(川崎 知子)

ある日、息子の友達 A ちゃんの家で、初めて遊びに行った時のことです。その子のお母さんと、4人でおやつを食べながらおしゃべりをしていました。「いつからこの町に住んでいるの?」という話になり、「A ちゃんが生まれる前から?」と何気なく聞いたら、「A は養子なの。A には両親が2人ずついるからラッキーなのよ。」という返事が返ってきました。さらに、「A は2週間に1度は”もう片方の”両親に会う。」ということも教えてくれました。お母さんは英語で私と話をしながら、A ちゃんにはオランダ語でどんな話をしているか訳していたようですが、A ちゃんはずっとニコニコしながら頷いていました。

私は、そのお母さんと私がお互いのことをそこまで知らないのにも関わらず、随分深いことを教えてくれたものだと思いました。と、同時に、そのお母さんにとってはそこまで深い話ではなく、誰にでも話すような事実なのかもしれないとも思いました。驚いている自分がなんだか恥ずかしくなり、それからずっと「オープンであること」や「人に隠さなければならないこと」「聞いてはならないこと」、極端に言うなら「タブー」について考えていました。

「タブー」の意味を改めて調べてみると、「もともとは未開社会や古代の社会で観察された、何をしてはならない、何をすべきであるという決まり事で、個人や共同体における行動のありようを規制する広義の文化的規範である。」と書かれていました。

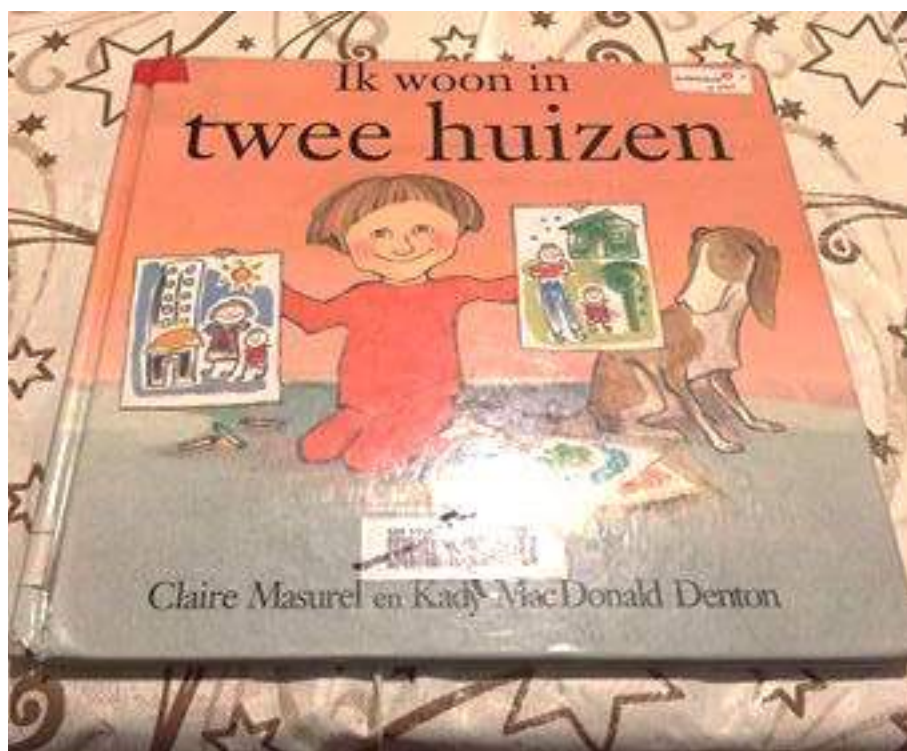
日本の文化では、家族の血縁関係はとても繊細なものであると思います。小学校の授業、特に4年生で「2分の1成人式」を行うにあたり、里子、養子、継子などに細心の配慮をしなければならないとされています。もちろん、子ども自身を傷つけるようなことになったり、いわゆる差別が起こったりすることは避けなければなりません。ただ、もう少しだけ「うちは里子なんだ。」とか「連れ子なんだ。」ということが言いやすい社会だったら、言った時に過剰に騒がれない社会だったらな、と思います。過剰に騒がれない、ということを考えていくと、やはり「2分の1成人式」のような大きい行事では、受け取り方も様々であろうし、結局差別に繋がったり、子ども自身や親自身が嫌な思いをすることにも繋がりがねません。結局、「この場では何を言っても大丈夫。」という風に、相手に対して信頼感をもつことが出来るかどうかにも繋がる気がして来ます。

話を戻すと、Aちゃんのお母さんの一言以外にも、オープン且つ多様性に配慮した文化に驚いた経験がいくつかあります。

一つは、息子が通っていたイエナプランスクールの学校案内です。保護者に関しての項目が20項目あったのですが、そのうちの3番目が「離婚した親への情報提供」でした。子どもと一緒に暮らしている親には、もう片方の親に子どもの学校の行事や成績などの情報を提供する義務があるという内容でした。おまけのように書かれているのではなく、3番目という早い段階でしっかり項目立てて書かれていることに驚きました。

もう一つは、「私には2つ家がある」という絵本を見つけたことです。別居をしている父母それぞれの家に主人公の部屋があり、それぞれの近所に友達がいるという内容です。ただそれだけの内容ですが、この絵本を読むだけで、こういう家もあるのだなということ子どもが幼い頃から理解すれば、特別扱いはしなくなるでしょう。同性婚の本や教材もあるトリヒテルズ直子さんの「0歳から始まるオランダの性教育」に書かれていたので、引き続き探してみます。

多数派を「普通」と決めつけて、少数派が「特別」だから配慮するのではなく、本当に、本当に、みんなが違う、みんなが暮らしやすい社会を一人一人が作っていきたくて改めて思う今日この頃です。



『私には2つ家がある』

クレア・マシュレル作 ケディ・マクドナルド・デントン絵 ファン・ホール出版

＝ オープンスクールデー レポート 後編 ＝

Jeanne d'Arc 2018. 3. 14

(山地 芽衣)

《高学年スペース》

ソファとテーブルのある廊下の隣に、ガラス張りの小さな図書室があります。静かに読書したり本を使って学習したりすることがその部屋の目的です。そのため、4人まで使えるとか、必ず静かにしなければならないというルール、「シーツ」という音を表す文字の掲示がありました。本の数はとくべつ多いわけではありませんが、くつろげるソファやくまのぬいぐるみがあり、心を落ち着かせて過ごせそうです。



ガイドの2人は、この読書スペースに限らず、廊下にあるパソコンの棚や、さらには、個別指導を受けている子のいる教室についても、自分の部屋を紹介するみたいに誇らしげに話してくれました。私が、「みんなで一齐に同じことを勉強していないだね」と話すと、ごく自然なことのように「みんな自分のペースがあるからね」と返ってきました。

《中学年スペース》

高学年スペースを抜けて廊下を歩いて行くと、中学年用の小さな図書スペースがありました。ここにもゆったりとくつろげる大きなビーズクッション。カラフルな時計。自分の部屋で本を読んでいるかのように感じられるだろうと思いました。

廊下を挟んでその反対側に教室があります。教室に入って目に入るのは、複数種類のあらゆる‘机’。一般的な学習机だけでなく、サークル時に座るベンチ、そして椅子のないハイテーブルの長机。椅子に座るも、床に座るも、座らずに立つも含めて、自分で学習しやすい場所を選べるとのことでした。自分の使う教材は、個人の教材ボックスに入れて持ち運んでいました。そのボックスは使わなければ棚に収納するようです。

何よりも驚いたのが、2つの中学年教室は、2.5m幅ほどのガラス扉を壁にして、お互いの教室の様子がよく見えるのです。解放的ですし、中学年内で移動して学習するときにはこの扉が開かれます。他にも活かし方はまだまだありそうです。しかもこの扉、数年前にただの壁からリフォームしたとの話でした。学習環境としての改善を思い切って図ったのだろうと思いました。

《多目的な入り口スペース》

校舎内をぐるっと一周して戻って来た入り口近辺。ラウンジのように丸テーブルと椅子が5箇所ほど広々と置いてあり、子どもたちが学習する場所としても使われているようです。座ってみると、事務員のいる受付、クラスごとの集合写真ポスター、そして校舎内を行き来する人の姿がよく見えます。私だったら、まるで活気あるカフェの中で勉強しているような気持ちになるだろうと思いました。

そしてこのスペースこそが、実は全校集会で集まる場所だったのです。月曜の朝や金曜の午後に、全校や保護者がここを占めるように集まるそうです。みんなが集える場所が、学校に入ってすぐの空間にあるなんてすてきなあとと思いました。

《校長先生との立ち話》

とにかく開放的な空間であること、そして何より子どもたちのガイドとしてのオーナーシップに感動したと伝えた私に、校長先生は「子どもたちはこういう実際の場面で力を発揮できるし、本当によく学んでいます」と、子どもたちの持つ本来の力を信じる眼差しと言葉で返してくれました。先生方のあたたかい雰囲気にも、あまり会話はしなかったものの、安心して子どもたちが過ごしているのではないかと容易に彼らの気持ちが想像できました。とはいえ、これまで長くイエナプラン校として存在していた間にも、“イエナプランらしい”間もあれば、“イエナプランらしくない”間もあったそうです。いずれにしても、「イエナプランに完成は存在しない」という大切なことを話してくれました。

最後に、なぜイエナプランに共感するのかを問うと、「よりよい未来に生きていくため」と校長先生は話しました。私たちはこの凄まじい速さでさらに複雑化するグローバル時代に、幸せに生きる社会をどのように創造していけるだろう？この大きすぎるように見えて、地球上の誰にでも共通する問いに、誰もが真正面から向き合ってもおかしくはない世の中だと思います。そして学校こそが、この問いに対して愚直に突き進んでいく重役があると感じたのです。

《おまけ》

また後で立ち寄ると話してあった保護者ルームへ行ってみると、5人の保護者たちが丸く座ってコーヒーを飲みながら、「子どもたちは自分の主張はするけど表現がキツイし、聞き手がどう受け止めるかっていう想像力もあんまりないし。可愛いし大好きだけど、コミュニケーションにおいてのしつけの仕方に悩むわ…」と議論の最中でした。子どもたちの自主性と、年上を敬うという自国のアジア文化の大切さについての心の中の葛藤。ここの暮らしにはここの暮らしなりの悩みがあることをしみじみ感じたのです。

とくにこの地域は移民が多く、生粋のオランダ系オランダ人が少ないようです。それゆえ、子どもだけでなく保護者も入学・転入当初は語学や文化面で不安があるため、このように保護者たちが集える部屋を作り、保護者も他の保護者とコネクトを増やし、安心してこの学校に関わる一員になれるようにサポートしているとのことでした。学校や家庭で子どもに何か問題が起きてしまったとしても、保護者同士、また、保護者と学校がしっかりと肩を組めていれば、問題はよりよく解決できる。逆に保護者に何か問題が起きたときでも、子ども同士、子どもと他の保護者、そして子どもと学校がつながって、よりよく解決できる、ということもあるのです。安心は子どものためだけではない、安心は与えられるだけのものではない。そこに関わるすべての人のために、そこに関わるすべての人によってこそ、安心なのだと感じさせられました。

とある保護者に、このオープンデーのことをどのように知ったのかを聞かれ、「偶然にも」と答えると、「偶然なんて存在しないんだよ。どれも運命。必然だよ。」と、すかさず言ってきました。

このオープンデーで見聞きしたこと、出会えた人、必然性に感謝しきれません。これからも何かの形でぜひまた足を運びたいです。



幼児向けの靴紐結びに関する本や練習キット

ママさん哲学者
マコの
哲学的オランダライフエッセイ

～ その4 ～

しつって大事なの？

(武田 昌子)

先日、家に戻った途端、長男 K が私に駆け寄ってきて、誇らしげにこう言った。

「ママ、今日ね、僕が2階をぜえ～んぶ片付けたんだよ。一人で！！」

めちゃめちゃ得意気です、本人（笑）。目がキラキラしちゃって、鼻息も荒く、興奮している様子がありありとわかります。もしかしたら、「子供が自分でお片付けをする」なんて、他のお宅では日常の出来事かもしれません。だけど、我が家ではいたって特別で異常な尋常ではない出来事なのだ。なぜかというと、子供達が生まれてからというもの、私は子供達にただの一度も「お片付けをしなさい」と言ったことがないので、

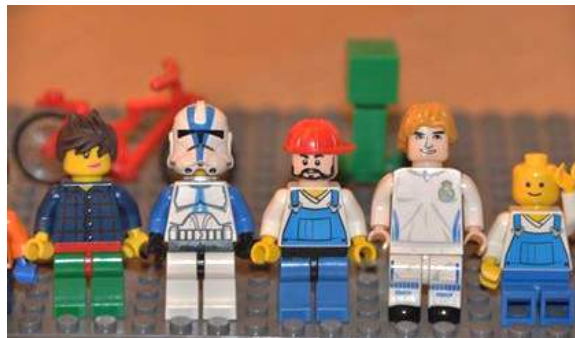
うちの屋根裏部屋は広いプレイスペースになっていて（20畳以上ある）、そこにはありとあらゆるおもちゃが大集結しています。遊びに来るお友達の数もハンパではないので、いつもこの部屋の散らかり具合は壮絶な態を奏しています。それでも、私が子供達に「片付けなさい」と言ったことはいまだかつて一度もありません。もしかしたら、こんな私は世間では「しつがなっていないダメ母」と呼ばれるのかもしれない。でも、私には私なりの理由があるのです。

まず第一番目の理由は、子供にとって片付けほど興味がないことはないだろう、ということ。私は、子供にとって大事なのは、遊ぶこと、それこそ、なりふり構わず、一生懸命夢中になって遊ぶこと、だと思っている。それを、「終わったら必ず1人で全部片付ける」なーんていう興ざめのルールで台無しにしたくないのです。もし、毎回お片付けを要求していたら、子供は、そのうち「今これを出したら、どうせ自分で片付けなきゃいけないんだよなあ・・・」なんて思うようになりはしないだろうか？ 挙げ句の果てには、「それだったら、出すのやめよーかなー」なんて、心にブレーキをかけてしまわないだろうか？ それくらいだったら、今のところは片付けは私が一手に引き受けてもいい、と心に決めました。

しかし、そんな私にも「そんなことをしたら、子供が片付けのできない子になってしまうのではないか？」という危惧はあった。でも、そこはうちの夫の例を考えたら、クリアできました。これが二番目の理由。彼のママ（つまり私のお姑さん）は、文句の付け所のないスーパー主婦なのです。彼女は、毎日欠かさず掃除機をかけ、家をいつだってピカピカに保ち、花瓶にはいつも素敵な生花を絶やさず、お料理だって大の得意。そのママは、自分の子供達を思いっきり甘やかして育てたので、私の主人やその兄弟は一度だって家の掃除や片付けを強要されたことはないのだそうです。

で、そうやって育てられた子供達は、さぞ片付けができないだろうと推測されますね。しかし、そんなことはないのです！主人も、彼のお兄さんも、とってもきれい好きだし、1人暮らしの頃から自分のアパートはいつだってきれいに保たれていました。一体これはどういうことなのでしょう？私が思うに、この人達はきれいに整理した家で育っていたから、それ以外の住環境が考えられないのだろうと思います。家はいつだってきれいなもの、整理されているもの。そして、それがどれだけ心地いいのかを、彼らはちゃんと学んできたのではないかと思うのです。お母さんが家族のために家をいつもきれいに整えてくれるのを、ちゃんと見て来たのではないかと思うのです。それなら、私もやってみようではないか、いつだって家を綺麗に快適に保つ母親。

そして、三番目の理由は、私が「しつけ」なるものを疑問視していることにあると思います。フーコーという哲学者は、しつけ（discipline）というものを、「大まかに言って、何千回と言われ続けたことにすぎない」と言い、「それは個性を壊し、空間や時間を、動きや行動を破壊する」と位置づけています。何千回と言いつつ聞かせて、強制的に何かをさせ、それが習慣化さえすればそれで安心、というのでしょうか？私には、どうしてもそうは思えないのです。



だいたい、オランダに住む日本人がみんな感嘆していることですが、オランダ人はいつも家や庭を本当に綺麗に整えています。オランダの学校では、毎日掃除の専門業者が来てお掃除をしてくれますから、日本のように、子供の頃から学校で掃除をさせられる訳ではありません。また、日本の子供のように、家に上がる時に靴を揃えることをしつけられたりもしていません。でも、そんな「しつけられていない」はずのオランダ人が、きちんと自分の家や庭の手入れができています。だとしたら、しつけって、子供の成長にとって本当に必要なものなのでしょうか？

それに、強制されているものは、その強制力がなくなった途端に効き目がなくなるものではないかと思います。家でお片付けを強要されている子供でも、片付けなくてもいい場所と状況になったら、そこではお片付けをしないでしょ。家や学校で掃除をきちんとやっていた人でも、一人暮らしになってその責任から解放された途端に“汚部屋暮らし”に突入する、なんていうことだって、よくあることではないでしょうか。強制力がなくても、自発的に片付けができること、また、したいと思えること、これが大事なんだと思います。

だから、私は心に決めたのです。片付けを強制するのではなく、彼らの心の中に自発的に「片付けよう」という気持ちが起こるまで待とう、と。そうして、子供達が生まれてこのかた、ひたすらおもちゃの片付けを一人でやってきました。それも、ただの片付けじゃありません。子供達が次に遊ぶときにお目当のおもちゃが取り出しやすいように、種類ごとにきちんと分けて収納ケースに入れて棚に整然と並べます。子供達が取り出して、どこか他の場所へ置き忘れたおもちゃも、必ず同じ場所に戻して、またいつでも好きな時に遊べるようにしておきます。そうやってきたのが、ようやく実を結んだのかもかもしれません。

その日、長男 K はいつものように屋根裏部屋でお友達と弟と 3 人で遊んでいたそうです。私は外出していたので、家にいたのは主人のみ。3 時間も遊べば、ありとあらゆるおもちゃが棚から取り出され、遊ばれ、床の上にぐちゃぐちゃにまき散らされ・・・親にとっては悪夢のような光景に（笑）！ところが、その光景を見つめていた K は、ふと気づいたように、「散らかってるなあ・・・」と言い、自分から片付けを始めたのだそうです（！）。そして、他の誰に協力を要請するでもなく、1 人でおもちゃをすべて決まった場所に戻して、がらんとした屋根裏部屋を見て、気持ちよさそうにほほ笑んだそうです。その一部始終をあっけにとられながら見ていた主人からその話を聞いて、私の心に何か自信のようなものが少しだけ生まれた。彼らを信じて、徹底して頑張ってきてよかったなあ。いや、別にこれが失敗してもよかったんだ。私は自分なりに考えて、自分なりに子供を信用して、自分なりの子育てをしているんだもの。たとえそれが、世間一般ではあまり好まれない放任主義ではあるとしても。

参考文献：ミシェル・フォーコー、「コレージュ・ド・フランス講義録」より

発行元：一般社団法人日本イエナプラン教育協会 オランダ支部

編集：一般社団法人日本イエナプラン教育協会 オランダ支部

E-mail : oranda@japanjenaplan.org